様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520307
研究課題名（和文）　日本におけるヘミングウェイ文献解題研究

研究課題名（英文）A Bibliography of Hemingway Research in Japan

研究代表者
千葉　義也（CHIBA YOSHIYA）
鹿児島大学・教育学部・教授
研究者番号：50041786

研究成果の概要：

私はこの10年、「書誌:日本におけるヘミングウェイ研究」の作成を行ってきたが、平成19年度と20年度には科学研究費補助金（基盤研究(C)）を取得し、その成果を、日本ヘミングウェイ協会編の学術誌『ヘミングウェイ研究』第9号と同10号に、それぞれ「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究-2007」と「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究-2008」を掲載した。これらを見ると、毎年いかに多くのヘミングウェイに関する論文やエッセイが日本に於いて書かれているかが一目瞭然に分かる。また、そればかりか、本書誌は作者の言葉を引いて、おおよその内容までをも推し量ることができるように工夫してあるので、今後、屋上屋を架するような論文の出てくることを防ぐことも出来ると信じる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００４年度			
２００５年度			
２００６年度			
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　各国文学・文学論
キーワード：日本　ヘミングウェイ　文献

１．研究開始当初の背景

ヘミングウェイ研究の最先端を行くアメリカには、少なくとも3点の立派な書誌がある。ひとつは、Audre Hanneman, *Ernest Hemingway: A Comprehensive Bibliography.* Princeton: Princeton UP,1967と、同著者に

よって1975年に出版されたその補遺。 2点目は、Linda Wagner, *Ernest Hemingway: A Reference Guide.* Boston: Hall, 1977.。3点目は、Kelli Larson, *Ernest Hemingway: A Reference Guide, 1974-1989.* Boston: Hall, 1990.である。

これらを見ればアメリカにおけるヘミングウェイ研究 の動向がほぼ分る。しかし、わが国にはいまだこれらに匹敵するような書誌はない。これがまずこの研究を手がけてみようという着想に至ったそもそもの背景である。

２．研究の目的

毎年、日本に於いてヘミングウェイに関して書かれる論文やエッセイはおびただしい。こうした文献を整理し、その要約のようなものを付したら、検索が容易になることはもちろんのこと、前述したように、屋上屋を架するような論文は出てこないはずであるという着想から、それならば、そうした書誌の作成を試みてみようというのがこの研究の大きな目的のひとつである。

３．研究の方法

以下に、主な研究の方法を箇条書きにして示す。

(1)非売品の物も含め、新しく刊行された書籍には網羅的に現物に当たる。

(2)学会誌、紀要、同人誌、商業誌等に掲載された個々の文献に当たる。

(3)年鑑等に掲載された書誌を調べ、実際の文献に当たる。

(4)個々の文献には内容の概略を付す。

４．研究成果

私は学術誌『ヘミングウェイ研究』(日本ヘミングウェイ協会）の選考委員長という立場から、毎年寄せられてくる多くの論文に目を通している。

しかし、時折、先行研究を踏まえていない論文に出くわし、愕然とすることがある。私はこの原因のひとつに日本における書誌の未整理があると考えた。

といっても、わが国にこれまで全く書誌がなかったわけではない。福田陸太郎編「日本におけるヘミングウェイおよびフォークナー文献」『比較文学』第3巻（日本比較文学会、1960年），高村勝治「ヘミングウェイ書誌」『ヘミングウェイ研究』(英宝社、1979年）はそのひとつの例である。

しかし、なんといっても、古い上に、執筆者とタイトルと雑誌名と発行年だけのデータでは、これからヘミングウェイに関する論文を執筆しようとする学生や研究者にとっては満足のいくものではない。やはり、個々の論文やエッセィの内容までもが少しでも掴める書誌が不可欠なのである。

私は日本ヘミングウェイ協会の資料室長も兼務していることから、学術誌『ヘミングウェイ研究』(日本ヘミングウェイ協会編）の創刊号（2000 年）から、単独で、個々の論文の概略まで付した書誌を作成してきた。

この私の作成した書誌で、ここ10年間における日本に於いて書かれたヘミングウェイに

関する論文やエッセィの数を調べるとおおよそ次のようになる。

1999年：154点、2000年：170点、2001年：229点、2002年：210点、2003年：362点、2004年：398点、2005年：257点、2006年：252点、2007年：252点、2008年：275点。

この膨大な数は、ヘミングウェイという作家がいかに日本人に親しまれ、かつ研究され続けてきたかを如実に物語っているとみなしていいだろう。

日本におけるヘミングウェイ研究は、先の福田陸太郎編「日本におけるヘミングウェイおよびフォークナー文献」『比較文学』第3巻（日本比較文学会、1960年）によると、伊藤整が『詩と詩論』第4号（厚生閣書店）にヘミングウェイに関する評論を掲載した1929年に始まる。

ということは、これまで、およそ80年間に渡って、日本のヘミングウェイ研究は続けられてきたことになるが、その長い歴史のなかでも、とりわけ目覚ましい進展が見られるのは1980年代以降である。

なかでも、特筆すべきはヘミングウェイ生誕百年に当たる 1999 年という年である。5 冊のヘミングウェイに関する単行本が出版され、3 つの雑誌がヘミングウェイに関する特集を組んだのである。これをひとつの頂点と呼んでよい。

ところで、書誌作成というのは地味ではあるが、絶対誰かがどこかでやらねばならない大切な仕事なのである。しかし、単なる文献の羅列なら、あまり意味はないだろうし、その価値も半減するだろう。

なぜなら、再三述べることになるが、その種の書誌は文献の内容が不明なので、後に続く者が同じことを繰り返す可能性があるからである。

私は大変な作業を覚悟の上、各文献のおおよその内容までもが掴めるものを作成してきたのである。そのためには、大小問わず、公にされた現物にはほとんどすべてに目を通したのである。

こうした私の仕事に対して、武藤脩二は「労作であり、大きな資料的価値を有する」（『ヘミングウェイ研究』創刊号）と述べれば、日本ヘミングウェイ協会会長、今村楯夫は最近、「ほぼ完璧に網羅した形」（『ヘミングウェイ研究』第 10 号）と述べた。この二人の言葉はそのまま私のこの研究のインパクトの大きさを物語っていると言っていい。

今後は、私はヘミングウェイ研究のひとつのサイクルの頂点とみなす、1999年から2008年に至る10年間の書誌をひとまずまとめて、公刊しようと決意している。そうなれば私の当座の目的はひとまず達成されたとみなしていいだろう。

もちろん、私はこれまで通り、単年度ごとの「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究」（日本ヘミングウェイ協会）は確実に継続、作成していくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

①千葉義也「ヘミングウェイを探して-私の書誌作り」（付：学術論文書誌（1999-2008））『ヘミングウェイ研究』（日本ヘミングウェイ協会）査読有り,第 10 号, 2009 年, 5-12 頁

②千葉義也「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究-2008」『ヘミングウェイ研究』（日本ヘミングウェイ協会）査読有り,第 10 号, 2009 年, 109-139 頁

③千葉義也「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究-2007」『ヘミングウェイ研究』（日本ヘミングウェイ協会）査読有り,第 9 号, 2008 年, 79-107 頁

④千葉義也「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究-2006」『ヘミングウェイ研究』（日本ヘミングウェイ協会）査読有り,第 8 号, 2007 年, 79-107 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
千葉　義也（CHIBA YOSHIYA）
鹿児島大学・教育学部・教授
研究者番号：50041786

(2)研究分担者

(3)連携研究者